



Title	Relationships of Site of Infarction and History of Previous Infarction with Short- and Long-term Prognosis After Acute Myocardial Infarction in Japan
Author(s)	西, 信雄
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3060173
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	西 信雄
博士の専攻	博士（医学）
分野の名称	第 10174 号
学位記番号	平成4年3月25日
学位授与年月日	学位規則第4条第1項該当
学位授与の要件	医学研究科 社会系専攻
学位論文名	Relationships of Site of Infarction and History of Previous Infarction with Short- and Long-term Prognosis After Acute Myocardial Infarction in Japan (急性心筋梗塞の短期及び長期予後に対する梗塞の既往、梗塞部位の影響)
論文審査委員	(主査) 教授 多田羅浩三 (副査) 教授 森本 兼彌 教授 多田 道彦

論文内容の要旨

(目的)

急性心筋梗塞の予後を規定する要因に関して、発症後短期（または入院中）及び長期（または退院後）の別にみた報告は欧米ではいくつかみられるが、虚血性心疾患の発症率の低いわが国からの報告は少ない。本研究は大都市の急性心筋梗塞患者が集中して治療を受ける中核病院の協力を得て、梗塞の既往の有無、梗塞部位が短期及び長期の予後に与える影響を明らかにすることを目的として分析を行った。

(対象および方法)

神戸市（人口150万人）の中核病院である市立中央市民病院のCCUに、1981年3月から1987年12月までに心筋梗塞発症後24時間以内に入院した市内在住患者について、入院診療録により既往歴、入院中経過を調査した。次に1988年12月の転帰を外来診療録、患者本人・家族への郵送による問い合わせ、通院医療機関への電話照会により確認した。死亡は心疾患による死亡のみとし、それ以外の原因による死亡は観察打ち切りとした。発症後28日までを短期とし、その時点の転帰が不明であった2人を除く308人について、平均40.8か月追跡を行った。

短期（発症後28日未満）と長期（発症後28日以後）のそれぞれにおいて、梗塞の既往の有無別梗塞部位別の生存率をKaplan-Meier法を用いて求め、logrank testにより検定を行った。さらに性、年齢、異常Q波の有無、Killip分類別重症度、CPK最高値の5変数とともに、短期では多重ロジスティックモデルを、長期ではCoxの比例ハザードモデルを用いて多変量解析を行った。

(結果)

1) 梗塞の既往の有無別梗塞部位別にみた短期生存率

対象308人中、発症後28日時点の生存者は270人（88%）であった。前壁梗塞の者が下壁梗塞の者より生存率が低い傾向を示し、初発の者において有意な差を認めた。

2) 梗塞の既往の有無別梗塞部位別にみた長期生存率

短期の生存者について求めた生存率は、発症1年後95%、5年後91%であった。再発の者が初発の者に比べ生存率が低い傾向を示し、下壁梗塞の者において有意な差を認めた。

3) 短期予後における多変量解析

短期予後は梗塞部位と有意な関連を示したが、梗塞の既往の有無とは有意な関連を示さなかった。
また年齢、Killip分類別重症度と有意な関連を示した。

4) 長期予後における多変量解析

長期予後は梗塞の既往の有無と有意な関連を示したが、梗塞部位とは有意な関連を示さなかった。
また年齢、異常Q波の有無、Killip分類別重症度と有意な関連を示した。

（総括）

1. 大都市の急性心筋梗塞患者が集中して治療を受ける中核病院において、予後調査を行った。
2. 短期（発症後28日未満）の生存率は88%であり、短期の生存者について求めた長期（発症後28日以後）の生存率は、1年後95%、5年後91%であった。
3. 短期の予後は梗塞部位と有意な関連を示し、梗塞の既往の有無とは有意な関連を示さなかった。
4. 長期の予後は梗塞の既往の有無と有意な関連を示し、梗塞部位とは有意な関連を示さなかった。

論文審査の結果の要旨

急性心筋梗塞の予後を規定する要因に関して、わが国では一定地域住民を対象にした報告は行われていない。本研究は大都市の急性心筋梗塞患者が集中して治療を受ける中核病院において、市内在住患者の予後調査を行い、発症後28日の時点で分けた短期、長期の予後に対する、梗塞の既往、梗塞部位の影響を明らかにしようとしたものである。その結果、短期においては梗塞部位が梗塞の既往の有無より強く予後に影響しており、長期においては梗塞の既往の有無が梗塞部位より強く予後に影響していることが明らかとなった。

この成果はわが国の虚血性心疾患の病態について、新たな知見を示したものであり、学位に値すると言える。